

第4回日本・中国・韓国気象学会共催国際会議の報告

日中韓気象学会共催国際会議2009実行委員会*

1. はじめに

2009年11月8日から10日にかけて、第4回日中韓気象学会共催国際会議が茨城県つくば市のつくば国際会議場（エポカルつくば）で開催され、261名の参加者を集めて盛況裏に終了した。本来ならば、本会議は本年5月26日から28日にかけて、日本気象学会春季大会にあわせて開催される予定であったが、新型インフルエンザの世界的な流行により、やむなく秋に延期となったものである。延期による辞退者もあったが、当日参加者も多かったため、結果的には当初の予定とほぼ同程度の参加者数での開催となった。本国際会議の背景については「天気」2009年4月号で詳しくお知らせしたので、ここでは会議の概要について報告する。本報告が、今後の3カ国による国際会議の企画・開催の参考になれば幸いである。

2. 開会式と国際会議の概要

開会式では、近藤 豊実行委員長による開会宣言のあと、新野 宏理事長（日本）、Chongying LI 会長代理（中国）、Jaiho OH 会長（韓国）による挨拶が行われた。続いて米国メリーランド大学の Eugenia KALNAY 教授による特別講演、そして各国代表による基調講演が、時岡達志氏（日本）、Chongying LI 氏（中国）、Dong-Kyou LEE 氏（韓国）の3名によって行われた。開会式直後に撮影された集合写真を第1図に掲げる。

一般講演は、口頭発表5会場とポスター会場で以下の8セッションに分かれて発表された。セッションごとの発表件数は、数値予報(28)、モンスーン(43)、エアロゾル・放射(56)、気候予測(22)、台風・メソ気象(44)、衛星リモートセンシング(29)、大気境界層(19)、その他(25)で、発表件数の総数は266件であった。国別では、日本(159)、中国(51)、韓国(51)、その他(5)であった。前回、中国で開催された国際会議では、多数の当日キャンセルが出て問題となったが、

今回は発表者の事前登録を義務化したため、当日キャンセルがほとんど出なかった。また、本会議の参加者を対象に、SOLA 特集号が企画され、各セッションのコンピーナーにより優秀な研究発表がノミネートされた。なお、SOLA 特集号では、それ以外の参加者による一般投稿も受け付けている。

初日の夕方に行われた懇親会では、筑波名物の「ガマの油の口上」が第19代名人永井兵助、吉岡久子さんにより実演され、多くの外国人参加者の興味を引いた（第2図）。

参加者によるすべてのセッションが終了した会議2日目の夕方には、しめくりとして KALNAY 教授により「4次元同化入門」と題した入門講座が若手研究者向けに開催された。また、会議3日目には、約50名の希望者を対象に、つくば研究学園都市の研究機関めぐりが企画され、国土地理院、気象研究所、筑波大学、産業技術総合研究所の各機関の施設見学が行われた。

3. 3カ国代表者会議

本国際会議の期間中、3カ国代表者会議が2回開催され、今後の日中韓気象学会共催国際会議の目的や方針について議論された。活発な議論の下で会議の運営体制の見直しが行われ、最終合意の結果が日中韓気象学会協定書（Protocol）として採択された。この協定書は第1回国際会議の際に採択された覚書（Memorandum）を更新するもので、3カ国の代表者の署名により成立した。そのおもな内容は、以下の通りである。

(1) 中国気象学会・韓国気象学会・日本気象学会（英語名のアルファベット順）は、大気科学における相互理解と友好関係の強化に合意し、気象学の地域的发展に平等に貢献し、日中韓気象学会の存在意義を他国に知らしめるよう努力することに同意する。

(2) 過去3回の国際会議開催の実績を踏まえ、今後は2年に一度の頻度で日本、韓国、中国の順に国際会議を開催する。

(3) 国際会議の企画にあたり、国際組織委員会

* 近藤 豊, 田中 博, 田中泰宙, 上野健一, 鬼頭昭雄, 近藤裕昭, 里村雄彦, 中澤哲夫, 三上正男



第1図 参加者の集合写真.



第2図 ガマの油口上.

(IOC) を設け、会議の目的や方向性について議論する。IOC には欧米からも委員を募り、より高い国際性を持つ会議を目指す。

(4) 国際会議の開催にあたり、IOC の承認の下でホスト国内に実行委員会 (LOC) を設け、具体的な準備・運営を委託する。

(5) 協定書の改廃は3カ国代表者の合意によって行

われ、国際会議開催に関する詳細については、台湾の参加条件などを含め、別に定めた細則に従うものとする。

4. おわりに

以上の協定書の合意に基づき、第5回日中韓気象学会共催国際会議は、2011年の秋に韓国で開催されることが決まった。2005年5月に第1回国際会議を開催して以来、回を重ねるごとに参加者が増えて、順調に回りだした本国際会議が、2巡目を迎えた今後も有意義な会議として継続されることを期待する。今後は、東アジアに拠点を置く他の国際会議 (AOGS : Asia Oceania Geosciences Society や WPGM : Western Pacific Geophysics Meeting) の中でどのように本会議を位置づけ、どのような特色を打ち出してゆくかが課題となる。

最後に、本会議の開催に協力して下さった筑波大学の学生、およびプライムインターナショナルの関係者の皆様、そして財政支援を行って頂いたつくば市にこの場を借りて感謝します。